

会員の皆様へ

今年、私の敬愛する、そして日本で最もすぐれた作曲家のひとりである三善晃氏が亡くなられました。研ぎ澄まされた音感覚、繊細と強靱を合わせもつ、独特な響きをする彼の音楽が私は好きです。お人柄は、何かこう、現実ではなく、その先の何かをいつもみているという感じで、そういうところが音楽にあらわれているかもしれません。

「アン・ヴェール」、「円環と交差」などは、今までいろいろ弾いてきた日本人の曲と比べてみると、ピアニスティックには、例えば、ご本人はあまり弾けないと（謙遜して）おっしゃる野田暉行氏、ピアノがうまかったという矢代秋雄氏よりずっと弾きにくく、ピアノを相当弾ける人が書いた一たとえばバルトークのように一ということがよくわかります。いい響きをつくるのが非常にむずかしく、部分的には弾けるか弾けないかの極限まで書いてあるのですが、その代わり、できた時には絶大な効果があがります。

三善先生がまだお元気な頃、私が彼のピアノ協奏曲を弾き終わった後、本当に嬉しそうに満面の笑み（笑うととてもかわいい）を浮かべて、私の背中をポンとたたかれたのがとても印象に残っています。矢代秋雄氏と無二の親友でいらしたそうなので、今ごろはおふたりで語り合っておられることでしょう。

秋のリサイタルは、おかげさまで満席と言ってもいいくらいに、たくさんの方々に聴いていただきました。シューマンのクライスレリアーナは、聴くよりも弾いてみると曲の真価がわかり、ロマン派の極致という感じ、曲にのみ込まれていくような魅力にあふれています。シューマンと一緒に心中するつもりで弾きました。アンコールには、プログラムに入っていないメンデルスゾーンとリストを加え、ロマン派の作曲家をほぼ網羅したつもりです。

今回は病的なショパンと妖しげなスクリャービンの組み合わせです。どうぞお楽しみに。

最後に新しいCDの紹介です。去年、シチリアで録音したショパンのコンチェルトがリリースされました。ピアノはショパンの時代の古い楽器、オーケストラのパートはオルガン奏者6人による演奏なので、ふだん聴き慣れているのとはだいぶちがう雰囲気かもしれませんが、ちょっと珍しい組み合わせなので、ぜひお聴きください。

今号の「ロンドン便り」には、大阪芸術大学教授で、ルネサンス期イタリア彫刻、明治期日伊交流史がご専門の石井元章さんにご寄稿いただきました。石井さん、ありがとうございました。

それでは皆様、よいお年をお迎えください。

来年もよろしくお願いたします。

2013年12月

岡田博美